ジェイムズの空間知覚論

～その意義と哲学的問題点

良峯　徳和

1．はじめに

空間の問題は当初からジェイムズの強い関心を引く問題であった。ジェイムズが「空間の性質(Spatial Quale)」と題された、空間に関する初めての論文を『マインド』誌上に発表したのは１８８７年のことである。それはジェイムズが心理学者として公的な論述活動を初めて二年目に書かれた雑誌論文で、全体では５番目というごく初期の学術論文であった。１８６３年の日付のあるジェイムズ２１歳の頃の手記には既に空間に関する議論が展開されており、そこには２７年後に出版されることになる『心理学原理』の中の「空間知覚」の章に現れる基本的テーゼの原型のいくつかを見ることもできる。『心理学原理』に収録された空間知覚に関する議論は、百ページを超える著しい長さを誇っている。なぜこれ程までに空間の問題がジェイムズの関心を引いたのであるか。

それを知るためには、あらかじめ空間に関する当時の哲学的・心理学的理論を概観しておく必要があるだろう。その上で本論では彼の空間論がいかなる思想的背景から構築されたかを跡づけ、その特徴及び独自性を明らかにするとともに、空間の問題がジェイムズの思想形成全体の中で担っている意義およびその哲学的な問題点に迫ってみたいと思う。

2．心理学における空間の問題

空間知覚の問題、すなわち人はいかにして物理的対象の世界が空間的な特徴、広がり、形、大きさ、奥行き等を持っていることを知り得るのかという問題は、きわめて古い起源を持つ哲学・心理学上の難問である。空間知覚の説明のため今日に至るまで心理学者は実にさまざまな仮説を提起してきた。その仮説のほとんどが、１８世紀の初期にバークリによって示された空間知覚における致命的な困難を何とか回避し、克服せんとして後の心理学者によって提出されたものである(1)。

その困難とは、感覚にはそもそも三次元空間を構成するに必要な要素など含まれてはい

ないという認識である。このようなバークリの認識を契機とし、その後の空間知覚論はいくつかの理論的方向へと分極化していくことになる。ジェイムズはバークリ以降、空間知覚に関して残された理論的に可能な道には三つの方向しかないと述べている。

それは第一に感覚には空間的性質など一切存在しないことを認め、その上で空間とは（感覚が）連続して存在する自体を示す単なる徴（シンボル）であると考えること。第二に、ある種の個別的感覚には延長の性質が直接的に存在していると考えること。そして第三の立場は、感覚はそれが最初に与えられたときには空間的ではないが、その後、心の内在的源泉から生ずるある性質によって空間的形式のうちに組み込まれ、統一され、秩序だてられながら発展すると考える[2]。　第一の立場は、空間的性質が経験を通して後から学習される観念だとする経験主義的ノミナリズムの立場である。逆に第二と第三の立場は、ともに我々に生まれつき空間的性質を認知するための機構が備わっていることを前提している。その機構は、前者においてはあくまで生理学的な組織として、後者においては精神のア・プリオリな能力として存在していると考えられているのである。第二、第三の立場をそれぞれ区別するため、今後は両者を「生得説(nativism)」「ア・プリオリズム(a priorism)」とそれぞれ呼ぶことにする。

ジェイムズ自身は第二の立場、すなわち空間の諸性質は直接的な感覚経験のうちに既に与えられているという空間感覚の「生得説」を提唱していた。しかしながら、ジェイムズのように空間に関して「生得説」を主張するものは、当時においては殆ど希有といってよかった[3]。つまり当時殆どすべての学者は、空間知覚の問題を経験主義的な伝統に則ってか、はたまた伝統的な超越論的主知主義に則ってかのどちらかの前提にたって説明しようとしていたのである。

経験主義者は、さまざまな心理学実験を試みて、空間の観念が構成されるのに必要な感覚要素やその手掛かりとなる身体的メカニズムを発見しようとしていた。つまりそこでは感覚の弁別や分離において限界となる最小単位の大きさや、位置や距離の判定のための手掛かりとなりうる特異な筋肉感覚の探求が、主たる研究内容となっていたのである。例えば、輻輳に伴う眼球の運動感覚、レンズ調節に伴う毛様筋の感覚、両眼視像の間に生ずる視差、さらには運動や平衡感覚に関連する三半器官、運動に際して生ずる筋肉上の感覚などがその主たる研究課題であった。それに対してカントに先導された主知主義の伝統に組する心理学者や哲学者（例えばショーペンハウエル、スタンプ、リップスといった主にドイツの学者達）は、より思弁的な方法で空間知覚を可能にする悟性機能の条件およびその

制約を探求しようとしていた。

この両陣営は伝統的に鋭く対立し、お互いに相容れない哲学を根底に持つものと一般に考えられてきた。だからこそジェイムズもまた空間論の可能性を三つに分け、自らと見解を同じくするもの以外は、第一もしくは第三のいずれか一方の見解に基礎を置くものと考えたのである。もちろんジェイムズの意図は歴代の空間に関する心理学理論をただ単に分類することにあったわけではない。ジェイムズの真意はさらに積極的に、自らの理論の独創性を明確化し、その妥当性を証明することにあったはずである。

その手続きは、必ずしもはっきりと実践されているわけではないが、おおよそ次のような三つの段階に分けて行われていると考えられる。まず第一に伝統的経験主義の主張をその究極にまで押し詰めてみることにより、その主張が自己充足するものたり得ないことを示す。次にそれがあくまで自らの主張を頑固に貫き通そうとすれば、どこかで自らの前提と相矛盾するア・プリオリズムの見解を暗黙に受け入れざるを得なくなり、最終的には自己破綻に陥ることを示す。第三にア・プリオリズムに則った空間知覚論は端的に経験的事実と一致しないため、心理学理論としては採用できないことを示す。このような段階的検討によってジェイムズは空間知覚の問題を論理的、かつ経験的にもうまく解決できるのは自らの生得論的立場だけしかないことを読者に納得させようと試みたのである。

最初にも述べたようにジェイムズは空間認識に伴う心理学上の問題に対し、きわめて早い時期から多大な関心を寄せていた。それはバークリによって空間知覚のメカニズムを感覚的要素から説明する際に生ずるジレンマがはっきりと露呈されて以来、心理学の歴史が本質的な進歩を遂げていない明白な証でもあると映ったからでもある。確かに心理学の実験手続きや精密な測定技術では多大な進歩が見られたかも知れない。しかしながら、心理学が拠って立つべき理論的基盤、哲学的基盤に関していえば、バークリの時代から進歩と呼ぶべき進歩はみられない。心理学者は相変わらず心の仕組みを究極的には抽象的な連合法則や悟性の超自然的能力に委ねているかのように見えた。そしてそのような事情を最も如実にあらわしているのが、心理学における空間の問題であった。ジェイムズが空間の問題にそれほど特異な関心を抱いたのも心理学という学問の理論的基盤に対するそのような批判的視点に立ってのことであると考えられるのである。

３．経験主義心理学～奥行きはいかに知覚されるか

空間知覚の心理学的解明に向けての第一の接近、それはいうまでもなく視覚に関するバークリの鋭い洞察力と明晰な分析に端を発している。それは感覚同士の連合をその最も根本的かつ深淵な法則として前提しているため、古典的連合主義と呼ぶこともできる。そこでは空間的性質が連続的に存在する感覚の集合体につけられた単なる名称にしか過ぎないというノミナリスティックな見地が採られるため、我々がいかなる感覚的経験をして「延長」「距離」といった空間的特徴の手掛かりとしているかを列挙することにその主眼がおかれてきた。そのような感覚的経験には、視覚経験における「両眼視差」「眼球調節」「輻輳」といったさまざまな現象、聴覚器官の一つである三半器官が担っている平衡ならびに運動方向感覚の経験、肢体の運動に伴う筋肉感覚の経験などが含まれる。

この探求の方向を最初に示したバークリは空間認識の解明に際し、感覚の様々な様態のなかでもとりわけ視覚の働きに注目した(4)。ただし彼にとって視覚と空間知覚との関係はネガティヴである。つまりバークリは空間が視覚の対象とはならないことを論じ、その意味で視覚感覚と空間認識との直接的な関係性をはっきりと否定したのである。バークリは次のように述べている。

> 空間、真空、三次元、これらは触覚の対象であるのと同様、また等しく視覚の対象でもあると思う人がおそらくいるだろう。しかし外部の観念と空間の観念を視覚の直接の対象であると考えたい誘惑がどれほど強かろうと、..... それは性急にして瞬間的な空想力の示唆から生じた妄想なのである(5)。

バークリによれば、大きさは直接的には視覚の対象とならない。網膜上の感覚はもともと奥行き、即ち三次元性を欠いており、それゆえ大きさ及び距離の概念は視覚感覚以外の何かによって引き出されなくてはならないのである。それは視覚的感覚そのものの中にあるのではなく、皮膚などで生じる触覚感覚、あるいは我々の感覚器の働きに密接して変化する筋肉運動感覚の中にある。奥行きを欠いた視覚像は、それら視覚以外に属する種々の感覚との連合によって、初めて奥行きの知覚を観察者の心の中に生じさせることができる。

このようなバークリの結論がその後の空間認識に関する探求の方向性を決定づけたとはいわないまでも、強烈な影響力を残したことは確かである。一般的にいうとバークリの空間知覚論は、その後の感覚主義心理学の展開において次の二つの点を確立した。第一に、奥行きは視覚的様相としてではなく、視覚的な記号により示唆された触覚的様相として与

えられること。第二に、触覚、視覚感覚には共通する性質が一切存在しないことである。それにもかかわらず、この両感覚は相互に連合によって結合され、一方の感覚を得るだけで、もう一方の感覚を思い起こすことができるようになる。つまり、人は対象物を見ることによりその触覚的な大きさ、形、位置を予知し、逆にそれを触ることによりその見え方を知りおくことができるようになるのである。このように異なった感覚様相間での感覚の連合を認めることにより、単一の感覚様相だけでは与えられなかった新たな種類の感覚所与間の関係性、すなわち複合観念が獲得されるようになる、というのがバークリの見通しだったのである。

しかしながら、ジェイムズが指摘しているように、バークリは感覚連合のメカニズムに対して最初から無理な要請をしていた。バークリの見通しは、たとえ視覚表象が奥行きを持たない平面的なものであったとしても、それと連合によって結合される他の感覚様相、すなわち触覚や筋肉運動の感覚などには、奥行き知覚を構成するために必須の感覚要素が含まれているはずだという点にあった。そのような感覚要素とは具体的にいえば、我々が事物に到達しようとする際に歩行によって体を運び、手を伸ばし、さらに指を広げてそれを掴むといった一連の身体（筋肉）運動、そして対象を掴んだり触ったりする際の触覚感覚のことをさしている。その空間知覚のメカニズムは、我々が山の写真を見て、その山に登ったときのさまざまな体験、苦労を思い出すのとちょうど同じように、ある風景を見ると、その視覚表象自体は平面だが、かつてその表象と関連して得た身体的経験を記憶の中から呼び起こし、意識の上で両者を合成し立体化して思惟するという働きである。

だが、このような単純な説明では、まだ一度も体験したことのない対象について、なぜ我々がそれを見ただけでその立体性や遠近度について知ることができるのかといった問いに答えることはできない。そのような困難を避けるためには、「足を運ぶ」、「手を伸ばす」といった限定された具体的な身体運動だけではなく、「見る」という身体行為そのものの中に、視覚表象の立体性、奥行き知覚の手掛かりとなるより一般的な筋肉運動、運動感覚が見いだされなくてはならないのである。そこで心理学者達は、単眼視、両眼視にそれぞれ含まれている奥行き知覚の手掛かりとなるようなさまざまな要素を取り出そうと試みてきた。

両眼視の場合、ある一つの対象を注視するにはその対象が目の近くに来るに従って各眼球を内側に回転させ、眼球の軸がまっすぐに対象を捉えるよう調節しなければならない（「両眼輻輳(convergence)」）。この眼球の回転運動は動眼筋の運動によって司られている

ため、しばしば視覚像が奥行きをもって感じられるのは主に両眼の輻輳効果に伴う筋肉の運動感覚であるとみなされてきた。視覚表象だけをとってみても、両眼視には奥行き知覚に役立ついくつかの手掛かりが含まれているという。それぞれの目は環境世界をわずかばかり異なった位置から見ているため、それぞれの目が受容する光景は若干異なっている。これら二つの光景がもつ若干のずれによって、我々は現在凝視する対象より手前にある光景はそれを二重に受容し（「二重像(double image)」）、またそのほかの光景についてもふたつの視線が角度をなしているため、角度のずれた二つの映像を同時に見ていることになる（「両眼視差(binocular disparity)」）。

しかしながら、たとえ両眼視における手掛かりが我々の通常の奥行き判断にどれほど重要な役割を担っていようとも、それらが奥行き知覚の決定的な規定要件でないこともまた明らかである。それは我々が単眼においてすら、環境世界をある程度の奥行き感を持って眺めることができるという事実から来る。単眼視の場合、ある対象を注視するとき、眼球にある水晶体のレンズ系は、眼球から対象までの距離に応じて自然のうちに調節が行われ、網膜に明瞭な像を結像する。これは水晶体を支える毛様筋の働きによるもので「水晶体調節(accommodation)」と呼ばれている。つまり単眼視においても「見る」という行為には、ある種の筋肉運動の感覚が随伴しており、それが奥行き知覚に何等かの貢献をなしていると考えられるのである。

これら奥行き知覚の手掛かりと考えられてきた運動感覚、筋肉効果の存在は、長い間バークリによる空間知覚説を裏づける証拠であるかのような取り扱いを受けてきた。しかしながら同時にこれら運動感覚の存在は、そのどれ一つをとってみても、それで我々の空間知覚の存在を説明するのに十分でないことも指摘され続けてきたのである。ジェイムズ自身、それらの非視覚的要因がいずれも、我々がなぜ外界の世界を三次元世界として知覚できるのかを説明するには余りに曖昧(ambiguous)であると一貫して論じている[6]。

ジェイムズの第一の論点は、数々の錯視の例が示してくれているように両眼視、単眼視いづれの場合でも対象の大きさと距離の間に必ずしも規則的な対応関係が見いだされるわけではないため、眼球の輻輳角も水晶体調節も対象の距離感の決め手とはならないという点にある。平面な紙面に描かれたさまざまな錯視図は、実際上平面図であるにも関わらず、我々見るものに立体感を与えてくれる。それは単眼視であろうと、両眼視であろうと変わらない。それらの錯視図をみて我々が奥行きの存在を感じ取るのは、むしろその図形が我々がすでによく見知っている立体的な物体の見え方を特徴的に示してくれているからであ

る。

> ある立体が他の形よりも容易に暗示され、あるいは当の平面図を平板なものとしてよりも立体的なものとして知覚することの方が一般に容易なのは、蓋然性に基づいているように思われる。それらの輪郭線は、それを紙の上に平板なものとして見たことはたった一度しかないのに対し、立体物によって網膜上にその線が描かれることは過去の経験上、数えることができないくらい多数ある。.....（このように）習慣、もしくは蓋然性もまた立体図や凹顔図(hollowface)の錯視現象を支配しているのである[7]。

錯視図から奥行きの感覚が得られるという事実は、我々が現実の対象を立体として知覚する際に手掛かりとなるとされてきた上記のさまざまな要因に関して、さらに重要なもう一つ事柄を明らかにしてくれる。平面上に描かれた錯視図からも我々が奥行き感覚を得ることができるということは、これまで多くの心理学者が奥行き知覚の構成要素として想定してきた輻輳効果、水晶体調節、両眼視差などの要因を一切必要とせずとも奥行き感覚が生じ得るということをはっきり示したことになるからである。このことから多くの構成主義的見地に立つ心理学者が仮定してきたような奥行きの手掛かりと奥行き感覚との関係は必ずしも第一次的なものではないということが分かるのである。

そもそもジェイムズが最も強く主張してきたことは、奥行き感覚のような空間知覚は対象知覚の際に随伴する輻輳効果をはじめとする種々の「奥行き知覚の手掛かり」なるものの総和に還元できるものではないということである。それはちょうどジェイムズが感覚においてレモネードの味は砂糖とレモンの味の加算ではないと主張したのと同じである。確かに我々が現実の対象を知覚する際には、単に視覚像だけではなく、眼球レンズの調節や両眼の輻輳角の調節などさまざまな身体活動が同時に行われている。それらのうちのほとんどは意識されないまま行われており、なかには目の機能を意図的に使えないようにして初めてその存在が気付かれるようなきわめて微妙な皮膚感覚の変化、聴覚感覚上の変化なども同時に進行している。けれども立体物の知覚と同時に進行する種々の身体的感覚的変化の総和がそのまま我々の奥行き知覚を構成しているわけではない。錯視図の例からも分かるように、それらの手掛かりが存在しなくとも我々は視覚像にその奥行きを見ることができる。いわゆる奥行きの手掛かりとは奥行き知覚に不可欠な必要条件でもなければ、充

分条件でもないのである。これらの手掛かりはジェイムズも指摘するとおり、曖昧な形でしか対象知覚に関与していないからである。

そもそもバークリ以来の経験主義心理学者達の誤りは、対象の知覚から視覚像だけを抽象し、我々の見ることのできるものは奥行きのない平面像に他ならないと断言した上で、視覚以外の感覚要素から奥行き性を付加してくれるものを捜し出そうとしたところにあった。そもそもバークリらは我々の視覚像が平面的に広がっているだけだということをどこから知り得たのであるか。我々の過去の経験を振り返ってみる限り、我々はこれまで一度も完全な平面像などを知覚したことはない。たとえ平面のスクリーン上に映った画像を見るにしても、我々にとってその画像は端に行けば行くほど隔たったところに存在するものとして映っている。完全な視覚的平面像とは、せいぜい虚構の二次元世界においてしか存在し得ないものである。さまざまな奥行きの手掛かりが付加されることによって、初めて立体性を持ち合わせるようになる平面的な視覚像など最初から存在しないのに、視覚像を平面像として前提したところにバークリ以降の誤りが始まったのである。そしてその誤りは経験主義の伝統を通じて数世紀間も受け継がれてきたわけである。

そのような前提から出発した心理学理論は、心理学の進歩がいかに精巧な実験装置や精密な測定技術を発達させ、新たな事実を生みださせたとしても、決して空間知覚に関する正しい説明には至らないだろうとジェイムズは考える。バークリ以後、感覚主義の心理学者は詳細な実験データの積み重ねと整理に追われ、全ての議論の出発点に疑問の目を向けることを怠っていたからである。ジェイムズはバークリ以後の経験主義心理学の伝統について次のように述べている。

> この問題の解決に際してイギリスの後続者たちは、バークリのやり方をそのまま踏襲した。彼らは我々が大概そうであったように、連合の結果としてさまざまな感覚同士の相互指示という考え方が空間知覚の問題を解消してくれると信じた。しかし、彼らは連合の原理にに酔いしれ、あるいは多くの細かな点にこだわり、それらの持つ一般的な意味あいを摑み損ねたために、源初的な空間経験が後に数多くの感覚上の指標と連合するようになるのはいかなる感覚的形態のもとにおいてであるかという点についても、原則として記述しておくべきだということを忘れてしまったのである。彼らの師であるロックが心はそれ自身にいかなる新たな単純観念をも形作ることができないということを既に見抜いていたにも関わらず、

その弟子たちは多くの場合、感覚同士の連合という枠組みの中だけで、それらが最初は所有していなかった延長の性質そのもの（それがどんなもので、どうやって生じてきたかを）を説明することができると考え、そして様々な形でそれを試みたのである[8]。

いかなる種類の感覚要素を持ってこようとそれらを連合することによっては奥行き感をはじめとして、我々の空間認識の根底にあるような基本的な性質などは生じて来るはずなどない、それらは感覚が連合されて後から合成され生じて来るようなタイプの感覚などではなく、我々が外界から感覚を得る際にあらかじめ与えられているような種類の対象感覚そのものであるとジェイムズは主張する。そのことからジェイムズは空間性の認知は後から経験の積み重ねによって修得、学習されるのでなく、対象との最初の接触である感覚的経験のうちに既に与えられているという生得説を支持することになった。その根底には、何世紀にも渡って繰り返されてきた経験主義心理学者達の誤りに対する深い反省がある。ジェイムズによれば、それまで経験主義心理学は空間の知覚を連合原理で無理やりに説明し尽くそうとしたためかえって自らの基本原理と自己撞着を起こすような立場へと追い込まれることになったのだという。このような伝統的経験主義心理学の自己破綻がいかにして生じてきたか、次にそれをジェイムズの論究に沿って明らかにして行きたい。

4．経験主義心理学の自己破綻

そもそも経験主義の原則に立つ心理学の究極の理念は、精神現象の説明に際してロックのいう「タブラ・ラサ(tabula rasa)」、すなわち経験の経過とともに心に与えられる感覚所与以外の何物からも出発しないとした上で、それ以降の高次の精神作用については、心理現象を支配するとされる唯一の法則と想定された連合法則によって一律説明しようとしたところにあったと思われる。しかしながら、バークリの指摘以降、空間知覚をそのような形で説明しようとする経験主義心理学の伝統は既に自己破綻の道を歩みつつあったのである。その直接的な原因は、バークリ以降の心理学者達がバークリの指摘を強い衝撃をもって受けとめたまでは良いものの、一方で経験主義心理学の根本的な前提、すなわち奥行き知覚などの空間の認識はさまざまな感覚要素の総合によって後から構成されるものだという見解についてはそれを疑ってもみず、鵜呑みにしてしてきた点にあろう。その結果、

空間知覚の心理学的説明に関する問題点は拡張され、奥行き知覚の問題に対してのみならず、空間認識の最も基本的な単位となるべき延長知覚の問題にまで及ぶこととなったのである。

経験主義心理学は連合主義をその基本原理として採用する一方で、同時に対象からもたらされる最初の感覚所与、すなわち印象(impression)をそれぞれ延長を持たない原子様態の純粋感覚であると想定した。このような傾向はヒュームのいわゆる「心のモザイク説」に端を発し（バークリも曖昧な形ではあるが感覚の最小単位を考えていた）、その後１９世紀のハートリにより経験主義心理学の理論的基盤として定着されてきた。そこでは感覚とは心理上の点でしかない。そのような原子感覚には色彩、痛み、味などといった性質とその強度上の違いしか存在せず、全ての知覚対象はそのような感覚点の集合体として把握されることになる。このような前提のもとでは、奥行きの知覚どころか長さや広さ、大きさといったあらゆる延長的性質がそれ自体では延長を持たない質点の集まりから説明されなくてはならない。（それら感覚の単位が延長をもっているとすれば、それらがさらに微小の単位に分割される可能性を担うという古来からのジレンマに陥るからである。）これは延長の性質を何か他の感覚的性質の組合せへと還元することである。その立場にたてば、我々は感覚としては直接延長を捉えることができないのだから、心は連合原理もしくはそれ以外の何等かの規則に基づいて、延長の性質を他の性質の組合せから生み出していることになる。

そのような心のモザイク説にとって延長とは多数の印象の並列的存在と考えられる。つまり個々の感覚印象には延長といった性質が伴っていないと想定されているわけだから、対象がいかなるかたちであれ延長を持つ、すなわち長さや広さ、大きさを持つということを知覚するためには、同一あるいは類似した性質を持つ感覚が異なった位置に同時に存在しているということが知覚されなければならない。しかしながらほとんどの心理学者は我々が同時に注意を向けることのできる対象の範囲がごく狭い領域に限られていることを知っている。視覚を例にとってみれば、対象のうちはっきりとした認知の行える範囲は目の焦点が当たっている地点のごく狭い周辺域でしかない。それではそのようなごく狭い中心点に収まりきらない延長を持つ対象の大きさを、瞬時の一瞥によって捉えることは不可能ということになる。それより少しでも大きな対象の知覚に当たってはどうしても焦点の移動、注意点の移動が必要とされるのである。焦点の移動には常に筋肉の運動が伴う。そこで幾人かの心理学者は注意点の移動や、手、指先といった感覚器の移動に伴う筋肉の運動

感覚こそ延長知覚の実体であると考えた。当時の心理学者達が空間的な延長の認知を説明するために運動なりその感覚なりを持ち出したということは、連合原理に則った彼らの説明体系がますます救いようのない袋小路に入り込みつつあることを示している。なぜなら彼らは延長の感覚が存在することを認めないにもかかわらず、他方で運動の感覚が存在することを前提としているからである。その傾向はひいては空間に対する我々の感覚可能性を否定しながら、他方で時間に対する我々の感覚可能性を疑うことなく前提してしまうところにまで行きつくのである。ジェイムズによればそのような傾向を代表する心理学者はブラウンである。ブラウンは次のように主張する。

> 私は一般に考えられているプロセスをちょうど逆さまにしてみたいと思う。つまり外延から時間の測度(measure)を導出するのではなく、外延の知識ならびに原本的な測度を時間から導出してみようと思うのである[9]。

しかしながら空間に関する感覚能力の方は疑われ、否定されるべきであり、時間に関する感覚能力についてはそれを疑うべくもなく、前提して良いとするだけの根拠は、決して見いだされるものではない。もし心理学者が同じように原子感覚を心理的点であると想定する感覚主義の立場に立つならば、そこから持続性をともなった時間の感覚を導き出すことは、延長性を導き出すのと同様の困難に直面するはずである。それにもかかわらず幾人かの感覚主義心理学者はそのような困難を一切度外視して、時間感覚についてはそれをあらかじめ我々の心的能力として認めてしまおうとする方向へと進んで行く。ここに我々は、経験主義心理学の本質的な特徴であるはずの経験に先立つ一切の心的能力を認めないという原則が崩れさっていく予兆を見て取ることができる。

経験主義心理学が自己破綻をみせていく兆候は他にもある。それは経験主義心理学の伝統にとってより一層致命的なものとなる。つまり感覚要素主義の思想と両輪の関係にあった連合法則の地位が、次第に悟性の能力によって取って変わられる傾向をみせ始めたのである。ジェイムズは何にもましてそのような傾向をみせ始めた心理学者に対し手厳しい批判を加えている。そのような傾向はいうならば経験主義が主知主義に対して大幅な迎合を行ったということであり、さらには経験科学としての心理学の理念から一歩退却することを意味するに他ならないからである。

確かに経験主義心理学は空間知覚の説明のため、連合法則だけではなく、しばしば理性

の能力、特に悟性の計算能力にその説明を求めてきた。そもそもそのような傾向はバークリが『視覚新論』を著した当時も、心理学者の間で主流を占めていたのである。バークリはそういった立場に立つ心理学者を「光学研究者」とか、「数学者」などと呼び、彼らの主張を根底から覆そうという意図から『視覚新論』を著したのであった(10)。しかしながらそのようなバークリの意図も、バークリの論述自体に伴っていた曖昧さのためか、必ずしもその後の空間知覚論の行方を統御するには至らなかった。バークリが我々の距離判断の根拠を説明するために持ち出した「示唆(suggestion)」という概念は感覚与件相互の連合のみならず、人を誤謬へと導く空想力やさまざまな与件を総合して判断する認知的な悟性機能とも結び付いており、結局は距離判断の根拠を直接的な感覚与件の連合法則のみから引き出して来ることに成功していないという実情がそこにはある。

バークリは空間知覚を説明するため、感覚相互の連合に過度な要請を行い、あたかも実際に連合のメカニズムが空間知覚を生み出しているかのような説明を行った。その際バークリは連合の働きのうちに「示唆」「判断」といったかなり曖昧で抽象的な心的能力までも含み入れ、空間認識がそれら抽象的な心的能力によって強く影響を受けるものであることを同時に示したのである。このことは結果として、その後の経験主義心理学者達の間に感覚与件そのものよりも「示唆」「判断」といったより高度で抽象的な心的能力に重点をおく主知主義的な動機づけを与えることにもなった。

このように経験主義心理学の出発当初から内含されてきた主知主義への傾向は、空間知覚のアポリアが最初考えられていたよりもはるかにデリケートで難解であることが明らかにされるにつれ、経験主義を標榜する心理学者の著作にも次第にはっきりと表れてくるようになる。そのような折衷主義的な心理学理論の登場こそ、まさしくバークリ以来堅持されてきた経験主義心理学が自己破綻を引き起こした最たる証なのである。

5．精神刺激論～折衷主義の空間知覚論

ジェイムズはそのような、いわば折衷主義的傾向をもつ感覚主義心理学者のことを「精神刺激論者(psychical stimulist)」と呼んだ。「精神刺激論」とは、本来スタンプがカントやショーペンハウアーなどのドイツの哲学者が主張する心のモデルに対して用いた呼び名である。それによれば、経験のみを源泉としては決して獲得することのできないいくつかの基本概念、例えば「延長」「実体」「因果性」等は、心ないしは悟性のうちにあらか

じめア・プリオリに備わっているものと前提される。そのうえで、外界との接触によって生ずるさまざまな感覚（直感）はそういった概念形態へ処理・分類・包摂されることによって、初めて対象を指示するものとしての意味を獲得できるとされたのである。しかしながら１９世紀の後半、伝統的な経験主義的アプローチから空間知覚の問題を追求することの困難を認識し始めた心理学者は表向きは経験主義心理学の立場を装いながらも、実質的には主知主義的な説明を自らの理論の中に取り入れるといった折衷主義によって空間知覚の問題に答えようとする傾向にあった。

このような折衷的立場を採用するに至った代表的な心理学者として、ジェイムズはドイツのヘルバルト、ヴント、ロッツェを、イギリスではブラウン、Ｊ．Ｓ．ミル、ベイン、スペンサーらの名前を挙げている。これらの心理学者はいずれも「延長」「連続」といった空間認識の基本的な概念が経験要素と連合法則だけからはもたらされないことを充分に自覚し、その上で感覚与件からそれらの概念を生み出す機構を心的能力として仮定しようとした。その典型的な例を我々はＪ．Ｓ．ミルの心的化学(mental chemistry)の提唱に見いだすことができる。この法則は、水素と酸素とから水が生ずる反応のように、化学反応が反応以前とは全く性質の異なる物質を生成することができることになぞらえたもので、心には外部から入り来るさまざまな感覚与件を単に相互に関係づけ、結び付けるだけでなく、その際全く別種の心的内容・観念を構成する能力も本来備わっていると主張したものである。ヴントのいわゆる「精神総合(psychical synthesis)」「統覚(apperception)」もこれと全く同種の心的能力を想定したものであり、「そもそも連合原理では決してなし得ないことを実現させようと意図され［導入され］た原理である[11]」とジェイムズは見なす。但しヴント自身は自分の統覚概念がミルの心的化学とは全く性質を異にするものであることを強調してはいた。それはヴントがミルの精神化学の考え方をそれ以前の連合原理と変わらないものとみなしていたからである。しかしながら、ミルの心的化学の考え方自体、古典的な連合の概念を既に逸脱したものであったことは明白である[12]。ジェイムズはこの両心理学者に対し、次のような論評を加えている。

> 要するに両者は第三の見解に組しながらも、他のところでは第一の見解を内包しているのである。単なる連合からは感覚に含まれていないものを獲得不可能であるということと、自然発生的な心の能力の認容を嫌うことの間で彼らはもがき、忌むべきジレンマに陥ったのである[13]。

このようなさまざまなヴァリエーションをもった精神刺激論者の主張も、根本的なところではかつてカントが空間について主張したことから一歩も先を出ていないとジェイムズは考える。ジェイムズの言葉を借りるとそれらはすべて「神話的(mythological)」な心的能力を仮定したところから出発している。ジェイムズはそれらの心理学者の主張のどこが神話的なのかを、逐一取り出して検討することはしていない。そのかわりにショーペンハウエルの空間論をその中で最も厳密かつ明確なものと見なし、その「根拠律の四つの根について(Über die Vierfache Wurzel des Satzes vom Zureichenden Grunde)」という論文からかなり長い引用をしたうえで、批評を加えている。

ショーペンハウアーは「知性は一切の経験に先立って空間や時間、さらには運動の可能性の直観を自己のうちに持っていなくてはならない[14]」と述べることにより、伝統的な経験主義の基本テーゼである一切の観念、一切の認識は経験のみに基づく、という主張を真っ向から否定する立場に立っていた。彼の主張がなぜ精神刺激論の代表格と見なされるに至ったかはショーペンハウアーの次の一節が如実に示してくれる。

> 触れたり見たりするときの諸過程に関してこれまで詳細に述べてきたことから明確になったのは、経験的直観は本質的には悟性の仕事であり、感官はそのために全体としては粗末な素材を感覚として悟性に提供するに過ぎない、ということである。従って、悟性は製作する芸術家であり、感官は材料を提供する下職人にすぎないわけである[15]。

ショーペンハウアーにとって、感官は悟性への単なる入力器官の地位へとおとしめられている。悟性に到達する以前の感覚与件は、混沌としたまだら模様を形成しているにすぎないようなさまざまな感覚の集まりであり、認識以前のまったくの素材でしかない。しかしながら、たとえそのような感覚の集まりが空間的な形式を持つ表象としては認識されなくとも、混沌とした感覚的性質の集まりとして存在していることは認知されるはずである。そうでなく、もし感覚が何の印象をも我々に与えないのだとしたら、感覚とはもはや心的過程としては存在せず、まったく名ばかりの概念だということになる。しかしながら、精神刺激論者の主張しているのはそこまで極端なことではない。彼らはあくまで感覚の存在をある種の原始的な心的存在、心に与えられるある種の印象として認めている。彼らの主張の本質は、むしろ感覚的存在だけでは空間や実体と行った高次の観念を構成できないと

いう点にある。低次の感覚印象を使っての高次の観念の構成はもっぱら悟性の心的操作に依存しているというのである。そうなると我々は外的対象の認識に当たって、いわば二種類の心的存在を相次いで持つことになる。最初は悟性による心的操作以前の原始的な感覚印象の集まりであり、その次はそれが時間・空間的な形式のもとで構成された表象ないしは観念である。

精神刺激論に向けられたジェイムズの批判はまず第一に、このような二段階にわたる心的内容とそれへの操作が実際には内的に経験されないという点にある。ジェイムズは次のようにいう。

> ショーペンハウアーはカント主義者の考え方を誰よりもまじめにかつ明確に表現している哲学者である。私は彼らの見解を神話的と呼ぶ。なぜなら私はカントのいうような心の機構を全く意識することはないし、貧しい感覚の力をこのように無慈悲な仕方で蔑んでしまう気にはなれない。私は心が空間を生み出す、あるいは創造するのを内省的に経験したことなどない。私のいう空間ー直観は二段階ではなく、一挙に生ずるものである。つまり受動的な非延長的感覚の生起する第一の契機があり、その後で能動的な延長的知覚の第二の契機が引き継ぐ、といった形式においてではなく、色がそのまま空間を占めるものとして直接的に感じられるという形式において、私は見るのである(16)。

ジェイムズ自身も上の引用文のすぐ後で認めているとおり、我々は一旦感官を通じて与えられた感覚与件に、比較・再生・抽象・変形といったさまざまな操作を加えて、加工することができる。そうであるからこそ我々は高度に抽象的で概念的な思考能力を現に獲得しているのである。しかしながらジェイムズの主張することは、対象は最初の感覚与件において既に空間的形式を備えたものとして心に与えられるということであり、決して最初は無秩序な感覚的性質の集まりとして、そしてその次の瞬間にそれが延長や奥行きを伴ったものとして、二段階にわたって心に映るのではないということである。

ジェイムズは主に我々の最も直接的な反省に訴えることによってその正当性を主張しようとしている。我々は対象を知覚する際、決して最初から微妙な色彩の織りなす妙や明るさの違いに気付くことはない。そのような感覚的な質そのものについて我々は殆ど注意を払うことはない。むしろ最初から対象がどのような形をしているのか、どのくらいの大き

さなのかといったことに意識が発し、その後でようやく細部の色彩やそのほかの感覚的性質に気付くことになる、というのが通常のあり方である。精神刺激論の立場をとる心理学者、哲学者はすべてこのような非常に日常的で基本的な体験を無視したところから出発し、理論の上だけでつじつまを合わせようとしている、これがジェイムズの彼らに対する批判の第一点であった[17]。

ジェイムズの批判の矛先は、第二に精神刺激論者が前提とするア・プリオリな空間形式、空間概念そのものに向けられる。既に見てきたように精神刺激論は、感覚が悟性の作用において空間・時間という形式のうちに組み入れられ、延長や奥行きをもった表象として統一されると考えてきた。また精神刺激論者もバークリ以来の伝統的見解を受け入れ、奥行きは視覚感覚からだけでは得られず、視覚像が立体性を獲得するためには奥行き知覚のためのさまざまな手掛かりを必要とすることを認めている。その手掛かりというのは既に見てきたように必然的に視覚感覚以外のもの、すなわち毛様筋をはじめとするさまざまな筋肉の運動感覚および種々の皮膚感覚を含むものでなければならない。そのうえで悟性がさまざまな感覚与件を空間形式のもとにまとめ上げるのだとすれば、それはさまざまな感覚様相にまたがって判断を行い、比較し、操作を加えるわけである。したがってそこでの空間とはあらゆる空間様相に共通なもの、あらゆる空間様相に対して同一基準を提供しうるものでなければならない。要するにそこで前提されている空間概念とは、いかなる感覚様相に対しても不変で唯一の形式である。しかしながらここにこそ主知主義的空間論の大きな見落としがあるのだとジェイムズは考える。

> カント的な見解の本質は多数の空間が存在するのではなく、唯一の空間、ひとつの無際限な連続的ユニットが存在するということであり、これに関する我々の知識は決してバラバラな感覚的事象からそれを足し合わせたり、抽象したりして生み出されてきたものではないということである。これに対する明かな反論は、もしなんであれ見たことのある対象がその前面にバラバラの（要素から）構成され、抽象された外観を持つとすれば、それこそがまさに世界の無限な単一空間の概念だということだ。たとえそれが過去からあったものだとしても、あくまで一つの概念(notion)であって、直観(intuition)などではない[18]。（強調はジェイムズ自身による）

ここでのジェイムズの反論は、ごく短いものであり、残念ながらジェイムズ自身が述べてているほど明白なものではない。ようするにカント主義者にとって空間の形式とはア・プリオリに心の中に存在するものであって、個別的な感覚ともそれらを抽象したり、構成したりする心的作用とも無関係に存在してきたものである。しかしながら我々にとって実際に感じられる空間とはその都度の経験と決して無関係なものではない。同一対象の空間的な形状に関する判断も、我々の刻々と変化する知覚経験に伴って変化していく。頭だけで理解する海の大きさと、目前で見る海の大きさは異なって感じられることはもちろん、大海原を航海すればその際に感じられる海の大きさはそれまでの感じとまた違ったものに感じられるだろう。同様に、舌先で感じられる歯の大きさは、実際に抜かれてみて目の前でみる歯の大きさとはまったく異なって感じられる。我々の空間に対する認識はきわめて不安定かつ曖昧なものであり、その都度の状況によって変化するものであるばかりでなく、たとえ同じ対象についてでも、目で見るのと手で触って感じるのとは異なって感じられるものなのである。

しかしながら精神刺激論者の主張に基づいて考えるならば、大きさとはすべての感覚与件が悟性において抽象され、比較され、総合され、統一的な空間形式へと変換された後になってはじめて直感にもたらされるものである。そうだとすればその場の状況に応じて、あるいは視覚や聴覚といった感覚様相の違いによって同一対象の大きさが異なって感じられるという事実はどのように説明されるべきなのか。このような事実を説明できないならば、精神刺激論は空間知覚の心的機構を説明する心理学モデルとしては不完全であるであるばかりでなく、同様の理由から触覚感覚による空間知覚と視覚感覚による空間知覚とを峻然と区別するに至ったバークリの功績をまったくの水泡に帰してしまうことになる。

むしろ感覚はそれ自体空間的性質を伴ったものとして、最初から我々に与えられているとジェイムズは考える。感覚はまず秩序を持たない感覚的性質の集合体として心に与えられ、その後で悟性によって空間的形式のうちへともたらされるのではなく、そもそもの最初から源初的な空間形態を伴っている。その源初的な空間形態は悟性によって感覚様態ごとに比較され、統一される以前の状態であるため、視覚によって感じられる対象の大きさと皮膚を介した触覚感覚によって感じられる大きさの感覚とはある程度異なっていると感じられても不思議ではない。延長や奥行きといった空間的性質も後から悟性によって生み出されたと考えるよりは、最初の感覚的接触において直接に与えられていると考えた方が、我々の日常的な対象把握の仕方に合っているのである。

このようにしてジェイムズはいまや空間知覚の心理学説明に関し、伝統的な経験主義心理学の立場とも、主知主義的な精神刺激論の立場とも異なる第三の方途を選択するに至ったのである。それは先に述べたように、ワードという唯一の例外を除いて当時の心理学者からはほとんど提起されることのなかった立場、すなわち先にも挙げた空間知覚の「生得説」なのである。

6．ジェイムズが空間知覚論に意図したこと

そもそもジェイムズが自らの空間論を「生得説」と呼んだのは、ヴントが空間知覚に関する心理学理論を二種類に分け、空間的性質が連合原理や悟性の作用などによって後天的に徐々に得られて行くというという基本的前提から出発するものを「発生論(generative)」と呼び、そうではなく感覚経験のうちにあらかじめ延長、大きさ、形、奥行きなどといった空間的性質が含まれているという基本的な前提を持つものを「生得的」と呼んだところから発しているという。しかしながら、ジェイムズは確かに自らの立場を生得説と呼び、発生論的見解から区別されたものとしてその言葉を用いているが、それは必ずしも自らの立場がそれらの見解とは対立する見解を支持しているという理由からではない。後にジェイムズは『プラグマティズム』のなかで、自らの見解が伝統的に対立すると見なされてきた二つの哲学的立場、すなわち経験主義と観念論とを和解させ、両者の橋渡しをする役割を目指していると述べることになるが、それとちょうど同じ態度が空間知覚について書かれたごく初期の心理学論文の中でも著されているのである。そこでは次のように述べられている。

> これまで疑問が投げかけられてきた見解の相違は延長の感覚的性質そのもの、即ち空間質(spatial quale)とこの延長の分解及び測定との区別を仕損じたことから生じたことのように思われる。この区別をしっかりと堅持することにより、経験主義と生得説とが和解でき、なおかつ両者がしばしば最大の強調を行ってきた事実についても公平な判断がなされることになると信ずる[19]。

ではジェイムズはいかにして、空間知覚に関し長い間対立してきた二つの見解、すなわち経験主義と生得説（この場合ア・プリオリズムのことを主に指していると考えられる）

とを和解させる判断を生み出そうとしているのか。そもそも空間知覚を説明する際の根本的な困難は、バークリにおいては奥行きが視覚的には決して与えられることはないという認識、そしてその後の心理学の展開にとっては延長の判断は感覚レベルでは決して与えられないという認識に端を発している。つまりバークリは視覚印象が常に二次元の像として心に与えられるものと考え、その上でそのような二次元上の視覚像に奥行きを付加してくれるものは何なのかを考えた。感覚論者達は感覚与件がそれ自体大きさを持たない原子状の感覚的性質の集まりと考え、その上で本来延長を持たない感覚の集まりに延長を付加してくれる働きは何処にあるのかを問い求めたのである。伝統的な経験主義心理学者達はその働きを心の唯一の法則である連合法則に求めようとしたが、連合法則では感覚要素同士の結合を説明することはできても、感覚には直接与えられないはずの延長や三次元的な大きさや形に関する性質の充分な認識は得られないということが次第に明らかになったのである。そこで心理学者達は連合原理の他に空間的な形式をア・プリオリに備えた悟性能力を想定し、この悟性がバラバラの感覚与件を概念的に比較・抽象・総合といった作用を行って、我々が通常経験しているような空間知覚を可能にしているのだと見なすようになった。これらの点については前節までの中で述べてきた通りである。

経験主義、主知主義心理学双方での議論の進め方を検討してみるならば、両者は共に感覚には本来空間的性質は伴っておらず、延長、大きさ、奥行き、形といった空間的性質は色彩や痛みといった感覚のその他の性質の間に何等かの関係性、すなわち同一性質の連続性や規則性を見いだし、その意味を解釈することによって得られるものだという見解をその出発点としていることがわかる。この点について、ジェイムズはミル、ベイン、スペンサー、さらにヘルバルト学派の心理学者達の見解を引合いに出し、共在する感覚の間に見いだされる規則的な秩序が空間的な配置として認識されるという心理学説が誤りであると批判している。ジェイムズは順序よく並んだ音程の例を挙げ、たとえ秩序だって均等に配列していたとしても、それらを我々は空間的配列をもって感じたりはしないと指摘する。さらにそのことから規則的な感覚配列が必ずしも空間的秩序の構成には役立たないのだと論じ、そのような学説は空間知覚の説明としては到底不充分なものであると結論づけるのである[20]。

伝統的な心理学では、いかなる対象であれ、何等かの測定を行う以前には長さも形も大きさも認識されることはないという、一見もっともらしい前提に基づいて議論がなされてきた。しかしながらジェイムズはこのような前提こそ実のところ正当化すべき根拠をもた

ず、心理学を誤った方向に導いてきた誤謬仮説であると指摘する。ジェイムズは次のようにいう。

> 秩序としての空間秩序は真に関係づけの思惟の産物である。しかし空間性質としてのそれは単純な感性の所与である。個人の心的歴史においては大きさについての単純で曖昧な意識としての空間が最初に来る。視覚領野、より正確には光についての感覚が感覚強度の量なしで存在し得ないのと同じように、空間についての感覚なしでは存在し得ないものである。しかし強度の度合はかくかくしかじかといった度合をもつということが認識されるためには、記憶作用、比較作用、認識作用を含む長い教育期間を必要とするが、延長の量も特定のフィート数、マイル数などというように知覚されるためには同様の教育を前提としている[21]。

ジェイムズ自身、対象の空間的性質がある程度客観的、かつ理解可能な形で記述されるためには、感覚によって直接我々に与えられる性質以外にも、それを他の対象（たとえば物差しの目盛り）と比較し、過去の同様の経験から類推するといった、より複雑な認知過程が必要となることを否定するものではない。それどころかそのような高度な認識がなされるようになるためには、長い間の経験の積み重ね、および学習の過程がいかに大切であるかをしばしば強調してさえもいる。しかしながらジェイムズは、それだからといって我々の空間知覚が、そのもっとも源初的な段階においてさえ、測定や比較、想起や計算という高度の精神的な認知過程を経て行われていると考えるだけの必然性はないと主張しているのである。

その理由としてジェイムズはまず第一に内省的な根拠を挙げる。例えば我々が目前の建造物の大きさや形状をなるだけ客観的に記述しようとするときに我々が感じるさまざまな内的な思考過程は、我々がただ対象を眺める、あるいは触るだけの場合にはまったく感じられない。だからといって我々はそれらの対象を空間的性質を持つ以前の、混沌として性質の集まりとして見たり、触ったりしているわけではない。それは見られたり、触られたりすると同時に既に空間的な存在として感じられているのである。

一部の心理学者、たとえばヘルムホルツは、このような内的な思考過程が内省的には気付かれないことから、それらの過程が実際は無意識のうちに行われているのだという仮説を立てた。しかしながらジェイムズはそのような無意識[22]の思考過程というのは、一種

の形容矛盾に当たるだけではなく、実質的にその存在を実証することも反証することもできない存在であるため、科学的仮説としての価値はないと考えている。無意識の思考過程はその定義から、決して意識に現れることがない。それゆえ、それ自体が意識的な過程なのかどうかも判別されえないのである。たとえばある時、我々の心の中で、空間的性質についての何らかの思考過程が進行していることに、ふと気づいたとしよう。しかしそのことから、普通はそれとほぼ同等の思考過程が無意識のうちに進行しているのだと判断することはできない。無意識の過程と自覚された心的過程とを、意識の上で比較することは不可能だからである。

ジェイムズは対象の大きさや位置の知覚のように、きわめて直感的になされる認知過程は、一部の心理学説者たちが解釈してきたような心理レベルでの作用と考えるより、生理レベルでの過程として考えるべきだと主張する。もしそれを身体の生理学的な機構に基づいた作用だと考えれば、将来感官の仕組みや神経組織の構造がより精確に研究され明かになるにつれて、そのメカニズムが徐々に解明されていくことを期待することもできる(23)。それに対して、もしそれを無意識な心的行為とみなすならば、それ自体は決して我々の観察の対象とはなり得ず、それへの探求への道は根拠を欠いた推測の域から出ることはなくなる。そこでは推測の真偽を巡って実りの無い議論が今後も長い間にわたって続けられて行くことであろう。それこそジェイムズが旧来の心理学の歴史から、新しい科学としての心理学を救い出すために阻止しなければならないと考えた誤謬の源泉の一つである。

このように考えてジェイムズは、我々が実際意識もしていないところに思考過程や推論過程の存在を前提し、そのうえで空間知覚のような我々の認知能力を説明しようとする傾向を否定した。それは心理学者が問題を解こうとする際にあれこれやってみる自らの思考過程を、そのまま別の心的現象にまで適用して説明してしまおうとする心理学者にありがちな誤謬推論であり、まさしくジェイムズが「心理学者の誤謬(psychologist's fallacy)」と呼ぶところのものに他ならない。ジェイムズが空間知覚の問題に際してとったアプローチも、伝統的な心理学者の当の問題に関する扱いの中にこのような誤謬推論が暗黙のうちに含まれていることを暴露し、現に生じている心理現象をありのままに評価するところから問題を捉え返すという方法である。そしてそのように問題を原点から見直すことこそ、経験主義と主知主義間で長い間対立し、揺れ動いてきた空間知覚に関する心理学説を和解へと導き、単なる空虚な論争ではなく、問題の実質的で具体的な解明へと心理学全体を向かわしめることになるとジェイムズは考えたのである。その意味で空間知覚の問題は、未

だ伝統的な形而上学と認識論の決着のつかない論争史の中から抜け出しきれない状態にあった心理学を、経験科学の一部門として独立させるために象徴的かつ重要な礎石の役割を果たすようジェイムズによって位置づけられていたのである。

しかしながらそのようなジェイムズのプログラムは必ずしも成功を収めたわけではない。空間知覚の問題を形而上学や認識論の範疇から何とか経験心理学で扱える実証的な問題（例えば生理学実験や観察によって検証されるような種類の問題）へと置き換えてやるというジェイムズの意図は、最終的にはジェイムズが自ら哲学の議論の中にすっかり入り込んでいくという皮肉な結果を生み出すことになる。その背景にはそもそも空間を知覚するとはどういうことなのかという問題を追求することによって次第に表面化するに至った特異な種類の問題が存在する。心理学者としてのジェイムズは、新しく頭をもたげてきたこの問題に対し徹底した追求を行う時間的・精神的余裕を持たなかった。その問題と正面を斬って対決するのは、ベルグソンを同志とし、自ら根本的経験論と呼ぶ哲学体系を唱えるに至った晩年のジェイムズである。そこまでのジェイムズの思索をたどることは本論の主旨ではない。ここでは最後にこの新たな問題がいかなる経緯のもとで生じてきたかを、心理学者としてのジェイムズの視点から概観してみることにする。

7.　結語～ジェイムズ空間論が残した問題

空間知覚の問題に関する限り、我々が対象と感官を通じて接触することが、そのまま当の対象を空間的存在として感じていることに他ならないとジェイムズはいう。感覚的に感じられた対象は、それ自体としてジェイムズが「空間質(spatial quale)」と呼ぶところの源初的な空間的性質を伴っている。それは色彩や痛みなどの感覚的性質と同じように、一切の知的作用に先立って存在している。ジェイムズは次のようにいう。

> 空間とはお分かりのように、単なる共在、単なる連続的秩序に加えられるべき何かである。我々が個物を、単にシンボル上で思い描くのではなく、空間的秩序の中で客観的に存在するものと直観する際には、そこへと個物が配置される空間は「空間」という言葉以外では記述することのできないような全く特殊な種類の感覚である。我々は網膜や皮膚上に生じている対象への直観を感覚の内容と呼ぶことに何故ためらうのであるか。誰しもが感覚の強さの度合はその感覚的性質の部

分であることを認めているにもかかわらず[24]。

ジェイムズによれば、この源初的な空間知覚は一切の測定や分析、総合に先立つという意味で、「曖昧(vague)」な状態にある。そこでは視覚、触覚、聴覚など感覚様相に共通する大きさの単位や基準はまだ存在していない。また同じ感覚様相においても、大きさの感覚が同一に保たれるわけではない。ジェイムズ自身も実験・観察しているようにコンパスの二先端で一定の距離を皮膚上に示したとしても、身体上の位置によってその距離はかなり異って感じられる。しかしながら源初的な空間感覚が曖昧だということで、ジェイムズが強調していることは、このような現象上の事柄ではなく、むしろ次の点である。つまり我々は対象から直接に大きさを感じるのであって、決して対象の知覚が多数の感覚要素から成り立っていることから、「推論」して大きさを感じるのではない。感じられるのは一種の感覚的な性質であって、数や量ではないのである。したがって我々の色彩に関する感覚が曖昧であるのと同じように、空間的な延長、もしくは大きさに関する知覚も曖昧となる。

一般に空間の性質を記述しようとすれば、我々はそれを何等かの形で数量化せざるを得ない。数量化する限り、我々はその空間を小さな単位に分割可能なものとして前提している。それに対し、色彩や痛みの感覚については、たとえそれが何等かの手段により数量化されるにしても、その数字は色や痛みの感覚とは本質的な関係を持ち得ない。色彩や痛みの感覚は純粋に私的(private)な性格を持ち、客観的な基準では計り得ないということがその理由として挙げられるだろう。同時に色彩や痛みといった感覚をより小さな単位へと細分化し、それらの集合体と考えることも、感覚の本質にとっては意味のないことである。

感覚的性質はいずれも分割や分析を寄せ付けないという性質をもっている。それらの感覚はただそのように感じられるということ自体が本質的なのである。ジェイムズは空間知覚も、それらの感覚的性質と同様の本質を持つという。空間的性質はすべての分析や総合に先立って、しかじかの空間を占めるものとして感じられることに根本的な特徴があるのであって、このような源初的な感じがあらかじめ存在していない限り、いかなる知的プロセスもその端緒を見いだし得ないはずである。この源初的な感じこそ空間知覚の根底にあって、空間知覚に伴って感じられる曖昧さのもとに存在するものなのである。ジェイムズはそのような空間的性質の曖昧性に関して次のように述べている。

その際、空間質は原始的で極めて曖昧(vague)な量(quantum)である。しかしそれは空間の性質である。曖昧という言葉はその外的な限界が不確定だということ、あるいは内部に部分を持たないこと、あるいはまたその両方の事柄を意味している。論理学の専門的な用法では曖昧とは「明晰」でも「判明」でもないことを意味している。視覚の曖昧な空間領域は分割されることにより、明晰かつ判明にもたらされる[25]。

ここでジェイムズが主張する空間質の曖昧性とは、空間的性質を認識する際に生ずる曖昧性ではなく、それ以前の段階で既に存在する曖昧性である。いいかえればそれは我々の知性が空間を測定し、認知するプロセスの過程で生じて来るような知的な曖昧性ではなく、空間的存在としての我々が生きていく限り、決してそれからは逃れられないような根源的な曖昧性なのである。曖昧なままの空間の知覚に比べれば、明晰で判明な性質を持つとされる一般的な空間の概念の方はむしろ後から構成された人工的な形式である。それは我々の知性が根源的な空間感覚を次々と分割して行き、そこに場所としての部分空間を設定することから生じていったとされる。いったん分割され、部分空間としての場所の集合体と見なされるに至った空間はさらに共通の基準や単位を与えられ、一層精密な形式のもとで記述されるようになったのである。

しかし一方で我々は源初的な空間質そのものについては殆ど何も知ることができない。それは概念による分析を本質的に寄せ付けないないからである。それに記述を与えることはそれを何等かの概念で分割し、分析することである。それによって得られた記述はすでに源初的な空間質の記述ではなく、それに対して知的な操作が加えられた結果でしかない。そのことを自覚してか、ジェイムズ自身もそのような源初的空間について、ほとんど具体的な記述を残していない。それはせいぜい我々がそれぞれ直接に経験しているもの、了解して馴染んでいるものとしてしか語られないのである。加えてそのような最初の無規定、無分割な空間知覚の状態から、いかにして部分が突出し、われわれの注意を捉え、次第に弁別、分割が進んでいくかについても、「それ以上は説明のできない我々の感性の究極的事実[26]」として認めざるをえないとしている。

このようなジェイムズの態度の根底には、我々の心的世界は最初から知的な概念装置では捉えられ得ないものであり、「現実の一層深い次元は知覚経験においてのみ見いだされる[27]」という思想が貫いている。その思想が後には純粋経験(pure experience)の思想へ

と受け継がれ、発展していったのである。また曖昧で連続的な一つの空間知覚から、多数の部分へと弁別され分割された空間概念が生ずるといった心理学的な視点も、晩年には「一と多(one and many)」という哲学の伝統的な問題へアプローチするための視点として再び取り上げられ、論じられることになった[28]。

ジェイムズが心理学者時代に取り上げた空間知覚の問題は、一方で形而上学的な議論に拘泥し続けてきた心理学の歴史に決着をつけ、新しい実証科学的な方法に基づく心理学を基礎づけようとする意図のもとで象徴的に取り上げられたわけだが、他方でそこに未解決のまま取り残された問題がジェイムズに後年哲学者としてなすべき仕事の方向性を与えるのに重要な意味を担うことになったのである。そういう意味でもジェイムズの空間知覚論は彼が心理学で扱った問題の中でもきわめて重要な位置を占めているということができるのである。

【註】

1. ボーリングはこのようなバークリの見解は空間知覚に関するその後の展開を二世紀にわたって支配したと述べている(Boring, E.G., Sensation and Perception in the History of Experimental Psychology, New York:Appleton-Century-Crofts, 1942, p. 263)。
2. James, William, The Principles of Psychology, Cambridge: Harvard Univ.Press, 1981, Vol.2, p.902.
3. 同様の立場を主張したジェイムズと同世代の心理学者として、他にジェイムズの友人でもあったジェイムズ・ワードの名前を上げることができる。ワードはジェイムズが自らの空間に関する見解を発表するよりもわずかに先んじて、１８８６年、当時のブリタニカ百科大事典（第９版）の中でその見解を発表している(reprinted in Ward, James, "Psychology" in Significant Contributions to the History of Psychology 1750-1920, Series A: Orientations, ed. by Daniel N. Robinson, University Publications of America, Inc., Vol.8, 1977, pp. 3-177, 特にpp.55-73)。ワードはいわゆる純粋感覚なるものが分析の産物でしかないことを強調し、感覚が相互に結合したり、結び付いたりしてより高次の意識様態を形成するようなことは経験されないと主張した。

「いわゆる純粋感覚などというものは心理学上の神話と見なしてよい(Ward, James, Psychological Principles reprinted in Significant Contributions to the History of Psychology 1750-1920, Series A: Orientations, Vol.8, p.143)」というワードの言葉はジェイムズなどともに当時の感覚主義論争に一つの基本路線を与えることにもなった。またワードは、感覚あるいは表象をそれ以上分解できない心理的な点として、つまり原子論的に把握することが不可能だということも主張した。ワードは感覚を内包的な質のみならず「外延性(extensity)」をも有するものとして考えるべきだと主張したのである。もし感覚がこの外延性をあらかじめ所有いないとすれば空間知覚などそもそも不可能であるというのがワードの空間知覚に関する基本的見解であった。このワードの見解がすぐ後に発表されたジェイムズの空間知覚論に多大な影響を与えたことはジェイムズ自身もはっきりと認めている(James, William, The Principles of Psychology, vol.2, p.911)。

4. Berkeley, George, An Essay Towards A New Theory of Vision, in The Works of George Berkeley, Vol.1, ed. by Luce, A.A. and Jessop, T.E., London: Thomas Nelson and Sons, 1948.
5. ibid., p.222.
6. James, William, The Principles of Psychology, vol.2, pp.856-869.
7. ibid., p.889.
8. ibid., p.901.
9. ibid.
10. Cf. Stack, George J., Berkeley's Analysis of Perception, Hague: Mouton & Co., 1970, 特にpp.10-49.
11. ibid.,p.902.
12. Cf.D.W.Hamlyn, Sensation and Perception, London: Routledge & Kegan Paul, 1961, pp.157-158.
13. James, William, The Principles of Psychology, vol.2, p.902.
14. Schopenhauer, Arthur, Über die vierfache Wurzel des Satzes vom zureihenden Grunde, Hamburg: Felix Meiner, 1957, p.73.(ショーペンハウアー、「根拠律の四つの根について」、生松敬三・金森誠也訳、『ショーペンハウアー全集1』、白水社、1972年、80頁)

15. ibid., p.101.（同上、p.108）

16. James, William, The Principles of Psychology, vol.2, p.108.

17.「客観性、主観性、方向、量、そしてあらゆる相関的な決定はそれに引き続く知的行為であり、それは記憶及び比較能力を前提としている。しかしこれら後者の機能はその所与の形式があらかじめ感覚として空間形式へとまとめられ上げていない限り、決して空間形態を形成することはない。」（James, William, "Spatial Quale" in his Essays in Psychology, Cambridge: Harvard Univ. Press, 1983, p.70）

18. James, William, The Principles of Psychology, vol.2, p.905.

19. James, William, "Spatial Quale", p.63.

20. Cf. James, William, "Spatial Quale", p.64, および The Principle of Psychology, vol.2, p.906.

21. James, William, "Spatial Quale", p.66.

22. ここでひとこと注意しておかねばならないのは、ヘルムホルツやジェイムズが問題としている「無意識」の概念は、今日の深層心理学で中心概念となっている「無意識」の概念とは異なっていることである。後者は一般に複合的信念のことを指しているが、前者は認知的無意識、すなわち無意識の思考過程のことを指している。

23. しかもその際、心理学におけるもっとも厄介なジレンマである、意識現象の生理現象への還元という問題は生じることはない。なぜならそこには最初から還元されるべき意識現象は存在しないとされているからである。同様の見解は視覚の対比効果の実験の解釈をめぐるヘルムホルツとヘリンクの間の議論に際してもとられた。cf. 拙論「ジェイムズの感覚論」、『哲学思想論叢』第７号、平成元年一月。

24. James, William, "Spatial Quale", p.65.

25. "Spatial Quale", p.67.

26. James, William, Psychology: Briefer Course, Cambridge: Harvard Univ. Press, 1984, p.295.

27. James, William, Some Problems Of Philosophy, Cambridge: Harvard Univ. Press, 1979, p.54.

28. ibid., pp.61-75.